

いわゆる「宋風獅子」の岩質について

朽津 信明

●キーワード：宗像大社 (Munakata Shrine), 観世音寺 (Kanzeonji Temple), 狛犬 (komainu), 石 (stone), 新大仏寺 (Shindaibutsuji Temple)

1. はじめに

日本には、平安時代後期から鎌倉時代頃にかけて、宋(中国)文化の影響を受けて成立したと指摘される文化財が少なからず残されているが、その中で「宋風獅子」と呼ばれる一連の存在が知られている(伊東:1989)。これらは日本の中世に当たる時期に石で製作された獅子像彫刻で、作風から宋で作られて日本に持ち込まれたか、来日した宋人が日本で製作したか、あるいはそれらの強い影響を受けて日本人の手で製作されたかのいずれかと考えられている。これらの作品が本当に宋で製作されたのかどうかを検証するためには、その石材の厳密な理解が必要不可欠であるが、ごく一部の例外を除いてはそれらの石材が科学分析を受けた報告はこれまでない。それどころか、石材名すら明らかにされていない作品も少なからず存在する状況である。これら宋風獅子の多くは現在は指定文化財となっており、その詳細な科学分析は現状では極めて困難な状況にあるが、可能な範囲で石材の持つ情報を引き出すことができれば、それらが相互に類似した材料でできているのかそうでないのかを個別に検証することが可能となり、ひいては宋から持ち込まれた石材であるかどうかを将来的に検討していく素材の一つを提供できるかも知れないと期待される。そこで本研究では、宋風獅子に関して非破壊という限られた条件下で可能な範囲の石材分析を試みたので、その結果についてここに報告する。

2. 調査対象

宋風獅子という言葉に厳密な定義はなく、従ってその現存数には定義次第で若干の上下があり得るが、一応本稿では「日本に伝世してきた、日本の中世に当たる時期に製作された石造獅子像の中で、作風に宋文化の影響が指摘されるもの」を宋風獅子と呼ぶとすれば、概ね北部九州と畿内を中心として十余例の存在が報告されている(井形:2005)。それらのうち、本研究では許可の得られた12例について調査を行った。また、比較対象として、宋風獅子とともに宗像大社に伝わり、宋から将来されたと考えられている阿弥陀経石や、近接した時代の代表的な石造仏像彫刻についても調査した。調査対象を表1に示し、以下にそれぞれを記載する。

①東大寺南大門石造獅子(奈良六大寺大観刊行会:1972)
(図1)

現在は奈良市の東大寺南大門内で金剛力士像の北側に、東西それぞれに存在している石造獅子である。二体いずれもが阿形の丸彫り像であるが、その東側像の台座右側面部分には、獅子のレリーフも彫られている。獅子像自身はいわゆる玉取・子取の像ではないが、作風から宋文化の影響が指摘されており、文献的にも『東大寺造立供養記』に、来日した宋人石工・六郎らによって宋から取り寄せられた石材を用いて日本で製作された獅子像が建久七(1196)年に東大寺中門に納められたことが記されており、この二像がそれに当たると解釈されている。石材は1950年代の修復時に科学分析が行われ、それによれば、構成されている複数の部材の中で微妙に性質が異

なる二種類が指摘されるが、石材名としては石灰質の砂岩と報告されており、類似した石材は日本の近畿地方にも産出するため宋から持ち込まれた石材であるかどうかは判断できないとされていた。しかし、近年の非破壊による調査によって、「デイサイト質凝灰岩ないし火山礫凝灰岩」との岩石名が報告され、中国寧波市近郊で産出する、梅園石と呼ばれる石材と類似していることが指摘された（服部，2008）。東側獅子像・獅子浮彫のある台座石、そして西側獅子像の石材をそれぞれ調査対象とし

た。

②宗像大社石造獅子（図2）（井形：2005）

福岡県宗像市の宗像大社神宝館に現在保管されている、一對の石造獅子で、片方が毬を取りもう片方が子獅子を抱く、いわゆる玉取・子取像である。それぞれ背中にある銘から、建仁元（1201）年に藤原支房によって納められたことが確認される。石材名はこれまでに特定されていないが、硬く緻密で滑らかな感のある石とされ、作風から宋で作られて日本に持ち込まれたものではないかと

表1 調査対象と結果一覧

*：獅子浮彫を持つ石材ではなく、中尊分台石にて実施

**：連打法ではなく単打法による値

Table 1 The measured objects and the result

番号	所有者等	作品名	卓越粒子	検出元素	硬度値	解釈	分類
1	東大寺	石造獅子（東側）	細粒砂	Fe	—	非石灰岩	—
		台座石（東側）	微粒砂	Fe, Ca	727	非石灰岩	—
		石造獅子（西側）	細粒砂	—	—	非石灰岩	—
2	宗像大社	石造獅子	非顕晶質	Ca	—	石灰岩	A
3	新大仏寺	浮彫獅子	中粒砂	Fe*	720	非石灰岩	B
4	由岐神社	石造獅子	非顕晶質	Ca	—	石灰岩	A
5	観世音寺	石造獅子	自形長石微粒子	Fe	—	非石灰岩	B
6	太祖神社	石造獅子(対)	非顕晶質	Ca	782	石灰岩	A
7	太祖神社	石造獅子(単)	非顕晶質	Ca	—	石灰岩	A
8	飯盛神社	石造獅子	細粒砂	Fe	557**	非石灰岩	B
9	熊野神社	石造獅子	微粒砂	Fe	829	非石灰岩	B
10	若宮八幡宮	石造獅子	針状長石	Fe	—	非石灰岩	B
11	風浪宮	石造獅子	シルト	Fe	—	非石灰岩	B
12	白山神社	石造獅子	微粒砂	Fe	809	非石灰岩	B
13	宗像大社	阿弥陀経石	微粒砂	Fe	—	非石灰岩	—
14	地藏峰寺	地藏菩薩坐像	中粒砂	—	800	非石灰岩	—



図1 ①東大寺南大門石造獅子（東側像）
台座石に獅子のレリーフも認められる。
Fig. 1 Stone lion of Todaiji Temple



図2 ②宗像大社石造獅子（子取阿形）
顔が正面を向く。
Fig. 2 Stone lion of Munakata Shrine

推定されている。阿吽両像を対象とした。

③新大仏寺浮彫獅子（田邊：1976）

三重県伊賀市の新大仏寺に現在ある石造須弥壇に浮彫りされた、獅子をはじめとするレリーフ群で、もともと東大寺を再建した重源によって1203年以前にこの地に建てられた、伊賀別所の本尊台座部分と考えられている。台座は円筒形に石材が並べられて構成され、その外側面に玉取・子取の獅子などのレリーフが彫られている。作風や、上記の①東大寺南大門における台座浮彫獅子との対比から、宋人石工の製作と推定する見解が有力で、学史的に岩質は凝灰岩とされてきたが、これも宋から持ち込まれた砂岩なのではないかとの指摘もある（山川：2006）。獅子浮彫の施されている石材で浮彫から外れる部分を調査対象とするとともに、現在は裏山で忠魂碑の基台に転用されて存在する、もともとは中尊分台石だったと考えられている浮彫の認められない石材も調査対象とした。

④由岐神社石造獅子（中野：1972）

現在は京都国立博物館に寄託されている、もともと鞍馬の由岐神社に伝わる一對の玉取・子取の石造獅子で、作風から②宗像大社獅子との類似が指摘されており、鎌倉時代に造られた宋風獅子と考えられている。石材名は言及されていない。阿吽両像を対象とした。

⑤観世音寺石造獅子（太宰府市史編集委員会：1998）

（図3）

大宰府市の観世音寺に伝わり、現在は同寺の宝蔵庫に

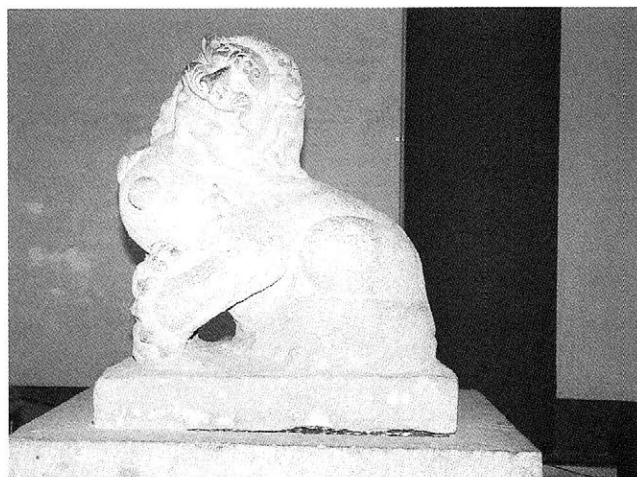


図3 ⑤観世音寺石造獅子（玉取阿形）
首が捻られて顔が長辺方向を向く。

Fig. 3 Stone lion of Kanzeonji Temple

保管されている一對の玉取・子取の石造獅子で、作風から②宗像大社獅子との類似が指摘されており、鎌倉時代に造られた宋風獅子と考えられている。石材名は言及されていない。目視から両像の石材は同種と判断し、阿形玉取像を対象とした。

⑥太祖神社石造獅子一對（福岡県教育委員会：1982）

現在は九州歴史資料館に寄託されている、もともと篠栗町の太祖神社に伝わる一對の玉取・子取の石造獅子で、作風から②宗像大社獅子との類似が指摘されており、鎌倉時代に造られた宋風獅子と考えられている。硬い石質とされるが、石材名は言及されていない。目視から両像の石材は同種と判断し、吽形玉取像を対象とした。

⑦太祖神社石造獅子吽形一体（伊東：1989）

現在は九州国立博物館に寄託されている、太祖神社に伝わる吽形玉取の石造獅子一体で、もともとは上記の⑥九州歴史資料館寄託の例と同様に一對だったものの片方だけ残存する状況と解釈されている。作風から上記の⑥九州歴史資料館寄託の例や、②宗像大社獅子との類似が指摘されており、鎌倉時代に造られた宋風獅子と考えられている。石材名は言及されていない。

⑧飯盛神社石造獅子（福岡県教育委員会：1982）（図4）

福岡市の飯盛神社に伝わる一對の玉取・子取の石造獅子で、作風から②宗像大社獅子との類似が指摘されており、南北朝時代頃に造られた宋風獅子と考えられている。石材は砂岩質と報告されている。阿吽両像を対象とした。

⑨熊野神社石造獅子（前田：1976）

現在は岡山県立博物館に寄託されている一体の石造獅子で、もとは赤磐市の熊野神社と岡山市の堰爪神社とで一對として伝わっていたもののうちの、阿形の方という。毬を取った状態の子獅子を抱く作風から、鎌倉時代頃の宋風獅子と考えられており、東大寺瓦が発見された窯址のごく近傍にあったことから、上記の①東大寺南大門や③新大仏寺など、重源による東大寺再建事業との関連が推測されている。石材名は言及されていない。

⑩若宮八幡宮石造獅子（久留米市立草野歴史資料館：1990）

久留米市の若宮八幡宮に伝わる石造獅子一体で、宝珠型に作られた同岩質の石造品と一對で伝わるという。玉取・子取像ではなく、また製作年代も不明ながら、作風



図4 ⑧飯盛神社石造獅子（玉取阿形）
首が捻られて顔が正面を向いていない。
Fig. 4 Stone lion of Imori Shrine

からこれまで触れてきた宋風獅子の流れを汲むものと考えられている。石材名は言及されていない。

①風浪宮石造獅子（福岡県教育委員会：1982）

大川市の風浪宮に伝わる石造獅子で、二匹の獅子が毬を取り合う状態で一つの台座上に作り出されている一個体である。製作は桃山時代頃まで下るとの見方もあるが、作風からこれまで触れてきた宋風獅子の流れを汲むものと考えられている。石材名は言及されていない。

②白山神社石造獅子（井形：2005）

久山町の白山神社に残されている石造獅子一对のそれぞれ残欠である。もとの状態や製作年代は不明ながら、作風からこれまで触れてきた宋風獅子の流れを汲むものと考えられている。石材名は言及されていない。左右両像を対象とした。

③宗像大社阿弥陀経石（副島：1957）

宗像大社神宝館に現在保管されている、表裏に阿弥陀如来と経文とがそれぞれ彫られた石碑である。本稿の対象である獅子像ではないが、上記②宗像大社獅子の関連資料と判断されることから、調査対象に含めた。碑文の内容や像の作風から、宋で製作されて日本に持ち込まれ

たものと考えられているが、追刻として承久二（1220）年を最古とする複数の和年号が確認され、それ以前から日本に存在していたことがわかる。石材名は石灰岩質とも言われるが、厳密には特定されていない。

④地蔵峰寺石造地藏菩薩坐像（川勝：1942）

和歌山県下津町の地蔵峰寺本堂に安置されている石造仏像彫刻で、これまで触れてきた宋風獅子とは歴史的意義が全く異なるが、来日した宋人石工の系譜で、伊派の行経が元亨三（1323）年に製作した旨の銘が刻まれていることから、製作年および製作者（背景）が明らかな同時代の石造彫刻の比較対照として調査対象に含めた。石材は和泉砂岩と報告されている。

3. 方法

各調査対象に対して以下に示す四通りの方法により、いずれも非破壊で調査を行った。なお、必ずしも各対象について全ての方法で調査を試みたわけではなく、それぞれの保管条件や表面状態に応じて、困難が予想された項目については調査を差し控えた。

3.1 接写

デジタルカメラにて、通常の全体写真の他に、後天的に破損してできた破断面をズーム・接写することで、岩石表面の特徴を像に触れることなく拡大して観察した。カメラはPanasonicDMC-FZ18を用い、18倍ズームのテレマクロ機構で必要に応じてクローズアップレンズDMW-LC55を装着して撮影した。

3.2 顕微鏡観察

上記で確認された破断面を顕微鏡でさらに拡大して表面観察を行った。顕微鏡はサンコーのUSBデジタル顕微鏡Dino-Liteをそれぞれの保管場所に持ち込み、その先端部（径約2cm）を測定対象に近づけることで（図5）、原則として20倍、必要に応じて200倍、500倍で、構成粒子の大きさ・形状や岩石組織の観察を行った。

3.3 元素分析

蛍光X線分析により、石材の元素分析を行った。セ

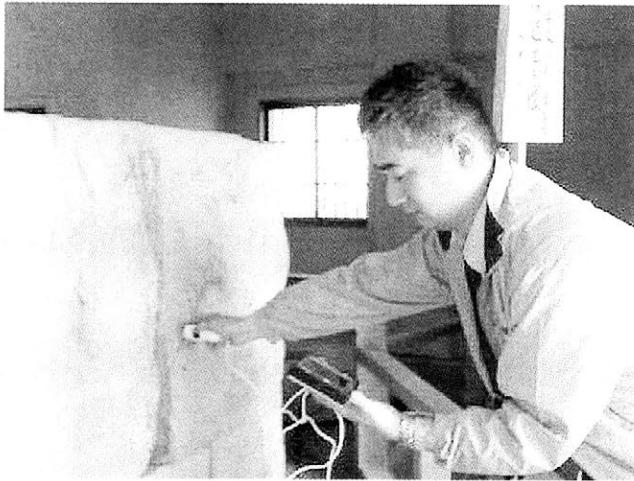


図5 顕微鏡観察風景 (③新大仏寺にて)

Fig. 5 Microscopic observation at Shindaibutsuji Temple

イコーイーアンドジー社製の100マイクロキュリーのアメリカシウム241を線源とした分析装置(朽津:2003)をそれぞれの保管場所に持ち込み、検出器を破断面に近づけた状態で120秒間の計測を行った。

3.4 硬さ調査

エコーチップ硬さ試験器を用いて、非破壊で石材の硬さ計測を試みた。先行研究(朽津:2007)に基づき、原則として同一箇所を20回連打しての計測(連打法)を五箇所で行い、各箇所ごとに得られる最大値三つの平均値の中で最高の値を硬度値として採用した。ただし、⑧飯盛神社の例に関しては、連続計測が困難であったため、単発の計測(単打法)を20回行い、その最大値三つの平均値を得た。

4. 結果

調査対象の中で、二体を一對の存在として記載した各例については、双方で行った観察結果に顕著な相違が認められたものはなかったため、以後では二体一對のことを一例と認識して記載する。結果を表1に示し、得られた代表的な元素分析結果を図6~8に、代表的な顕微鏡写真を図9、10に、そして代表的なズーム写真を図11~14にそれぞれ示す。

まず、元素分析の結果、②宗像大社獅子、④由岐神社、⑥太祖神社一對、⑦太祖神社一体では、いずれもカルシウムが顕著に検出され、それ以外の元素は殆ど検出され

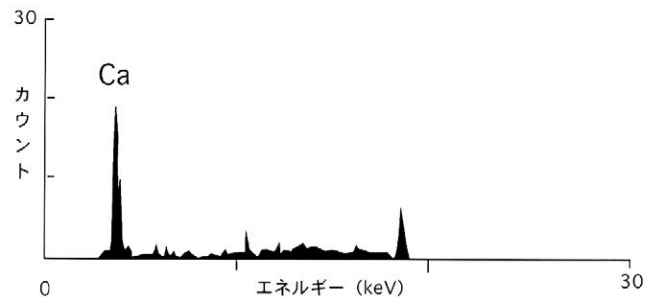


図6 ②宗像大社獅子の元素分析結果
カルシウムが顕著に検出される。

Fig. 6 The result of chemical analysis of the stone lion at Munakata Shrine

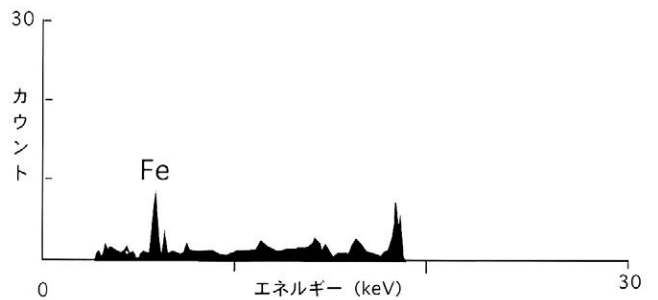


図7 ⑤観世音寺獅子の元素分析結果
鉄が僅かに検出される他には目立った元素は確認されない。

Fig. 7 The result of chemical analysis of the stone lion at Kanzeonji Temple

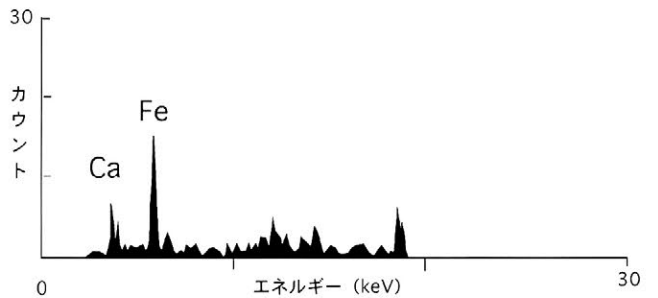


図8 ①東大寺南大門東側獅子台座石の元素分析結果
鉄とカルシウムが僅かに検出される。

Fig. 8 The result of chemical analysis of the pedestal stone at Todaiji Temple

なかった(図6)。以後、これらをAグループとする。これに対し、③新大仏寺(浮彫獅子ではなく、中尊分台石で実行)、⑤観世音寺、⑧飯盛神社、⑨熊野神社、⑩若宮八幡宮、⑪風浪宮、⑫白山神社の各例では、鉄が僅かに検出された以外は他の元素は乏しかった(図7)。以後これらをBグループとする。⑬宗像大社阿弥陀経石も、元素分析結果はBグループと同様だった。最後に①東大寺南大門の例では、東側獅子像では上記Bグループと同様の分析結果だったが、台座石では鉄とカル

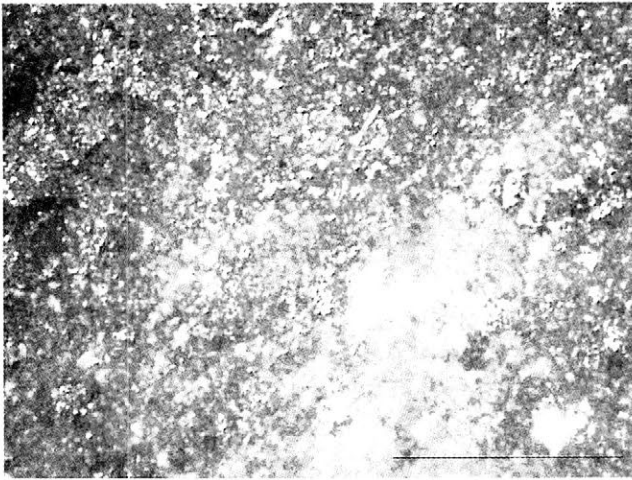


図9 ②宗像大社獅子の顕微鏡写真
写真中の—が500 μ m

Fig.9 Microscopic photo of the stone lion at Todaiji Temple
— means 500 μ m.

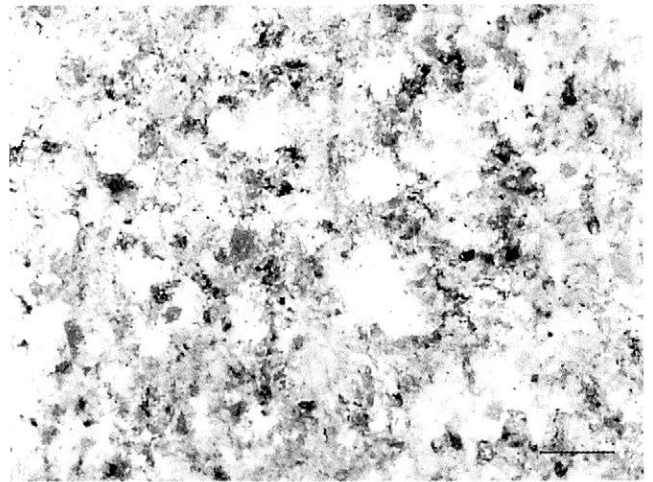


図12 ③新大仏寺台座石材のズーム写真
写真中の—が1 mm

Fig.12 Close-up photo of the stone lion at Shindaibutsuji Temple
— means 1 mm.

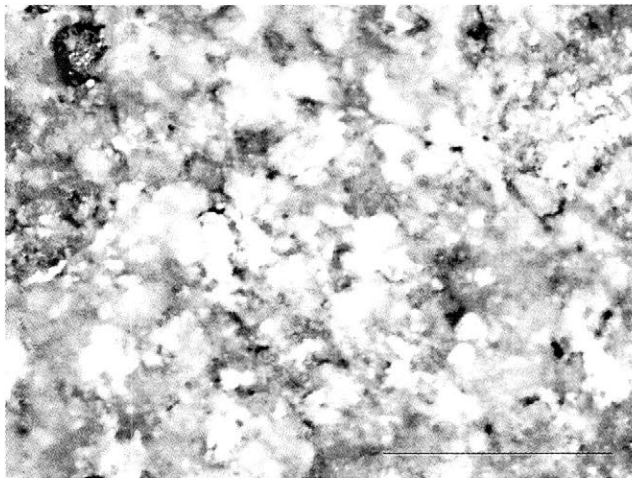


図10 ⑫白山神社獅子の顕微鏡写真
写真中の—が500 μ m

Fig.10 Microscopic photo of the stone lion at Hakusan Shrine.
— means 500 μ m.

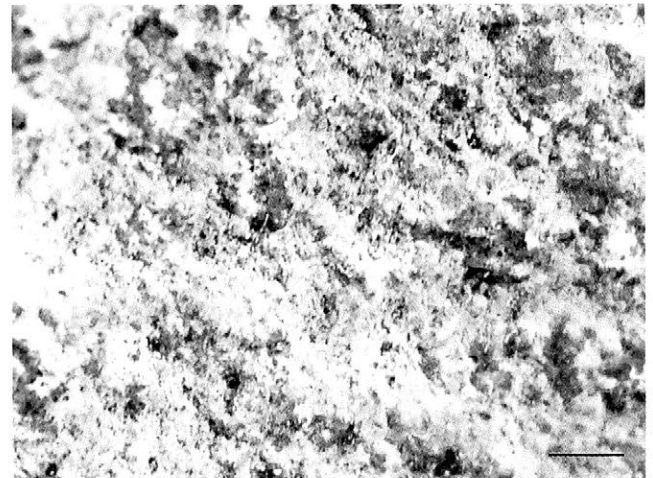


図13 ⑩若宮八幡宮獅子のズーム写真
写真中の—が1 mm

Fig.13 Close-up photo of the stone lion at Wakamiyahachiman Shrine
— means 1 mm.

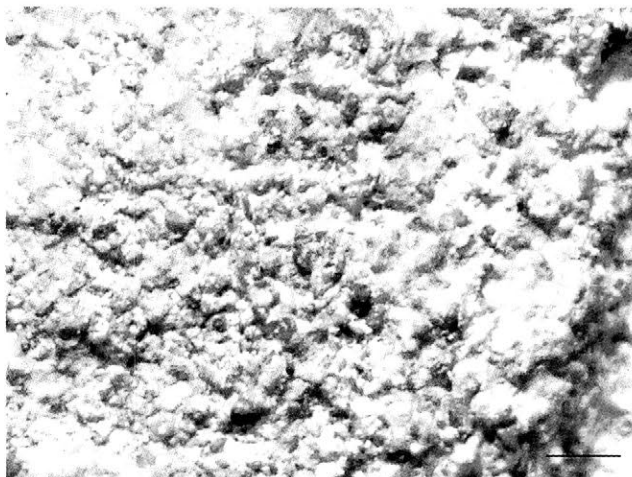


図11 ⑧飯盛神社獅子のズーム写真
写真中の—が1 mm

Fig.11 Close-up photo of the stone lion at Imori Shrine
— means 1 mm.



図14 ①東大寺南大門東側獅子のズーム写真
写真中の—が1 mm

Fig.14 Close-up photo of the stone lion at Todaiji Temple
— means 1 mm.

シウムの両方がそれぞれ僅かに検出された(図8)。

写真観察及び実体顕微鏡観察の結果、構成粒子の形状などの特徴が明瞭には確認できないタイプ(非顕晶質)と、確認可能なタイプ(顕晶質)とに分けられ、後者はさらに粒子の特徴によっていくつかのタイプに細分された。

まず、上記Aグループの②宗像大社獅子、④由岐神社、⑥太祖神社一対、⑦太祖神社一体の各例はいずれも非顕晶質であり、⑦太祖神社一体に僅かに黒色のシルトサイズ(径1/256~1/16mm)の粒子が認められた以外には、いずれも無色透明な部分が卓越した(図9)。

その他はいずれも顕晶質で、⑨熊野神社、⑫白山神社、そして⑬宗像大社経石の各例では、微粒砂サイズ(径1/16~1/8mm)の岩片粒子が豊富に認められた(図10)。⑧飯盛神社、⑪風浪宮、そして⑭地蔵峰寺の各例でも、岩片粒子が認められたが、粒子サイズがそれぞれで異なり、順番に細粒砂サイズ(径1/8~1/4mm)(図11)、シルトサイズ、中粒砂サイズ(径1/4~1/2mm)が卓越した。③新大仏寺と⑤観世音寺の例では、やや角張った形状で、恐らく自形(鉱物本来の形状)に近い形状を保つ長石と見られる粒子が認められた。前者では中粒砂サイズの粒子の卓越が確認された(図12)が、後者では微粒砂サイズに相当する粒子が認められたものの、それ以外の構成粒子がはっきりとは確認されなかった。(なお、新大仏寺では、獅子浮彫を持つ石材と、元素分析を行った中尊分台石とで顕微鏡下での特徴が一致した)。⑩若宮八幡宮の例では、針状の微細な(1/16mm未満)無色透明粒子が多数認められ、また黒色の直方体状粒子も認められた(図13)。

既に「デイサイト質凝灰岩ないし火山礫凝灰岩」と報告されていた、①東大寺南大門の例では、東側獅子像と西側獅子像とでは、細粒砂サイズの岩片粒子が認められ(図14)、東側台座石でも類似した特徴を持つ微粒砂サイズの粒子が確認された。

硬さ調査が行えた例では、①東大寺南大門東側台座石では硬度値727、③新大仏寺で獅子浮彫を持つ石では硬度値720、⑥太祖神社一対では硬度値782、⑨熊野神社では硬度値829、⑭地蔵峰寺では硬度値800であり、⑧飯盛神社では単打法により557の値が得られた。

5. 考察

5.1 石材名の推定

石材名を厳密に特定するためには、薄片観察などの破壊調査が必要不可欠であり、非破壊という前提の本研究で言及する内容はあくまでも推測の域を出ないが、得られた情報に基づいて以下に各石材について論考する。

まず、カルシウムが顕著に検出されたAグループの②宗像大社、④由岐神社、⑥太祖神社一対、⑦太祖神社一体の各例は、いずれも石灰岩と呼ばれるべき石材と考えられる。変成作用を受けて再結晶した石灰岩が、特に大理石(または結晶質石灰岩)の名称で呼ばれることがあるが、今回の調査では再結晶の有無は確認できていないため、大理石の概念をも含めた広義の意味で、これらの石材を石灰岩と呼ぶことにする。これらが相互に同一の石材と見なせるかどうかは、本調査だけでは判断できないが、後述のBグループとは明確に性格が異なる石材として区別される。

次にBグループの中で岩片粒子が認められた、⑧飯盛神社、⑨熊野神社、⑫白山神社の各例、そして岩石組織にこれと一部共通する特徴を持つ⑬宗像大社経石と⑭地蔵峰寺の例については、粒子サイズの面からは砂岩という名称が想定される。つまり⑬宗像大社経石は、②宗像大社獅子とは異なる石材で構成されていると判断される。ただし、同じように砂サイズの粒子から構成される①東大寺南大門の例が、その粒子の供給源が火山性物質であることに基づき凝灰岩の範疇と報告されている(服部, 2008)ことから、粒子サイズだけで石材名を特定することは避け、ここではAグループの石灰岩とは異なる範疇の石材である点までを指摘するに留める。また、⑪風浪宮の例については、粒子サイズでは泥岩(またはシルト岩)の範疇と考えられるが、やはり厳密な石材名の言及は避ける。これらの石材には粒度などの面から相互に微妙な差異が認識されるものもあるが、非破壊の調査に基づくため、それぞれの比較や、産地の推定などの言及は差し控える。③新大仏寺の例に関しては、同寺周辺に分布する阿波層群平松層(藤原ほか: 2005)の中に、顕微鏡下での特徴がこれと酷似する凝灰質砂岩が普遍的に存在しており、同寺造営時の整地に伴って大量に切り

出されたであろう石材が、本尊台座に利用されたとの解釈を敢えて否定しなければならない材料は見あたらない。⑤観世音寺の例にも、自形に近い粒子が確認されるため、同様に凝灰質砂岩か凝灰岩である可能性もあるが、他の粒子の状態を確認できていないため、今回の非破壊調査の情報だけでは正確な岩石名を与えるには至らない。

⑩若宮八幡宮の例は、カルシウムの検出が乏しいという点ではBグループに属するが、針状粒子の存在状況がこれまで述べてきた各例とは異なり、火山岩の範疇に属する可能性が推測される。認められた黒色粒子を輝石類だと仮定すれば、安山岩質である可能性も想起されるが、厳密な石材名を非破壊調査だけで特定するのは困難である。

5.2. 使用石材の評価

今回の調査により、一連の宋風獅子の中に、石灰岩製と推定されるものが四例（一対のものは一例と数える）確認された。石灰岩は言うまでもなく日本にも豊富に産出し、加工事例も歴史的に少なからず存在するが、丸彫りの石灰岩製彫刻となると南北朝時代以降のものが知られているに過ぎず（川勝：1998）、少なくとも②宗像大社獅子に見られる1201年を遡る銘が確認される作例は今のところ知られていない。これに対して、中国では古来普遍的に石灰岩が丸彫り彫刻材料として使用されてきていることは、例えば唐代陵墓に見られる石灰岩製獅子像の例（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・西安文物保護修復センター：2007）を見ても明らかに指摘可能である。また、Aグループの四例では、いずれも顔がほぼ正面（短辺）方向を向いているという共通点を見出すことができる（仮に縦向きと呼ぶ）（図2）が、この特徴もまた中国における石造獅子像には一般的に認められる（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・西安文物保護修復センター：2007）。なお、これらの作品では、これまで「硬い石材」に刻まれていると記載される場合が多かった（井形：2005）が、今回調査を行えた⑥太祖神社一対で得られた硬度値782は、硬岩の範疇ではあるものの、計測を行えた他の例に比べて特に硬いということはない。

これに対しBグループとした石灰岩ではない石材で

できた石造獅子については、Aグループとは異なる石材であるという意味においては1323年に日本で加工された和泉砂岩製とされる⑭地蔵峰寺の例と同じ範疇と捉えられ、また平安時代とされる福島県南相馬市の薬師堂石仏（小高町教育委員会：1968）など、使用石材の面では古くから日本での類例を指摘可能である。硬度の面から、⑨熊野神社で得られた829や⑫白山神社で得られた809の値は、⑭地蔵峰寺の800の値とも類似し、また⑧飯盛神社で単打法で得られた557の値は、過去の研究（青木・松倉：2004）に基づいて連打法の値に換算して考えても750を下回る軟岩の値である可能性が想定され、いずれも極端に硬い石が用いられているわけではない。また、仮に推測通り安山岩製や凝灰質砂岩製の例があったとしても、日本の鎌倉時代前後に認められる彫刻材料の範囲（川勝：1998）を逸脱するものではない。

このBグループに属する石造獅子のうち、⑤観世音寺、⑧飯盛神社、⑨熊野神社、⑩若宮八幡宮、⑪風浪宮の各例は、像が首を捻るように作られており（図3、4）、顔が正面を向いていないという共通点を見出すことができる（仮に横向きと呼ぶ）。これは残存状況が良好でないために顔の向きが特定できない⑫白山神社の例を除いて、Bグループの丸彫り獅子像全てに共通する特徴と言える。全てが縦向きの上記Aグループとは明確に異なっている。日本の歴史的な石造獅子・狛犬を見ると、むしろ縦向きの例も横向きの例もいずれも数多く報告されている（藤倉：1995）が、比較的古い例として紹介されているものに限定すれば、丹後地方の高森神社（文和四（1355）年の銘あり）や重要文化財の籠神社の例（図15）、そして奈良の都祁水分神社（鎌倉末とされる）など（川勝：1965）でも共通して観察される特徴と指摘することができる。

最後に①東大寺南大門の例については、カルシウムが検出される部材もあることから単純に上記Bグループに含めることはできないが、その硬度値727は③新大仏寺の720とも類似し、物性面からは特に異例の石材とは捉えられない。しかしながら、彩色が確認される（朽津：2008）点や、その大きさが今回取り上げた他の丸彫り獅子像の数倍規模である点など、他の例とは一線を画して議論されるべき存在と思われる。なお、その首の向きは

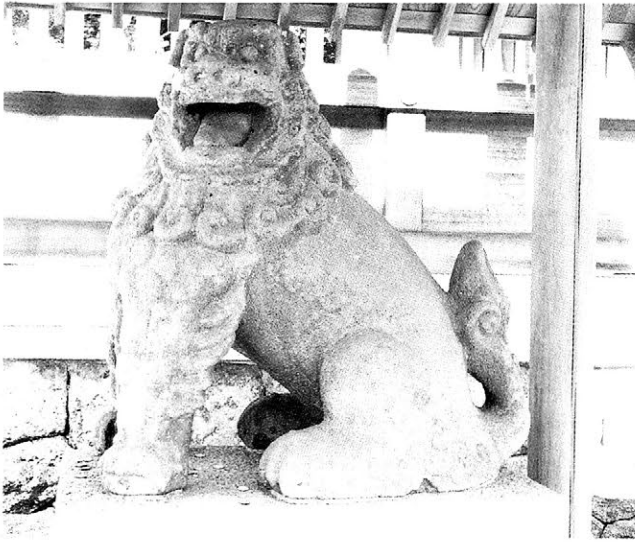


図15 籠神社石造獅子・狛犬の獅子（阿形）
学史的には鎌倉時代のもものとされてきた（川勝：1965）が、
桃山時代頃まで下らせて理解しようとする見解（藤倉：
1995）まで、その年代観には様々な意見がある。顔が長辺
方向を向く。

Fig. 15 Stone komainu (lion) at Kono Shrine

上記分類で言えば縦向きに相当する（図1）。

以上から、本稿で取り上げた宋風獅子と呼ばれる作品群のうち、鎌倉時代以前の日本における石造彫刻としては類例の乏しい、石灰岩に刻まれたと判断されるものは、そうでない石材、すなわちそれ以前から日本で彫刻材料として利用されてきた種類の石材に刻まれたものとは、作風の面においても一線を画している可能性が指摘される。このことが示す意味について、彫刻史的な背景を踏まえた上での議論が期待される。

6. まとめ

北部九州と畿内を中心として、日本に残る12例の宋風獅子と、それに関連する石造文化財の材質について非破壊で調査を行った結果、宗像大社獅子のように石灰岩製と判断されるものと、飯盛神社獅子のようにそうでない石材で作られていると判断されているものとの、大きく二分された。それぞれの石材の産地は特定されないものの、石材の異なる二つのグループには作風の違いも指摘され、石材が異なる事実が示す意義に関する議論の展開が期待される。

謝 辞

本研究における調査は、本文に記載したそれぞれの所有者および寄託先管理者のご理解・ご協力の下で行われたことを記して感謝申し上げるとともに、以下にお名前を挙げる方々には特に格別の便宜をお図りいただいた。文化庁美術学芸課の奥健夫・横内裕人調査官、九州歴史資料館の井形進学芸員、久留米市立草野歴史資料館の樋口一成氏、岡山県立博物館の中田利枝子学芸員、大川市教育委員会の椛島健二氏。また、本稿における岩石記載に際して、鳥根大学の入月俊明教授と元地質調査所の服部仁氏から、また歴史的背景に関して大和郡山市教育委員会の山川均氏から有益なご助言をいただいた。さらに、みやこ町歴史民俗博物館の井上信隆学芸員と東京文化財研究所の森井順之研究員には、現地において調査を一部補佐していただいた。以上を記して御礼申し上げます。

引用文献

- 青木 久・松倉公憲 2004「エコーチップ硬さ試験器の紹介とその反発値と一軸圧縮強度との関係に関する一考察」『地形』25 pp.267-276
- 服部 仁 2008「東大寺石獅子の石材について」『東大寺石獅子をめぐる研究集会』pp.27-34 中日石造物研究会
- 井形 進 2005「宗像大社の宋風獅子とその周辺」『仏教芸術』283 pp.81-98
- 伊東史朗 1989『狛犬』日本の美術 279 至文堂
- 小高町教育委員会 1968『史跡薬師堂石仏 付阿弥陀堂石仏 史跡観音堂石仏修理工事報告書』
- 川勝政太郎 1942「地藏峯寺石佛と石大工行經」『史迹と美術』144 pp.13-11
- 川勝政太郎 1965「石造狛犬の系列」『史迹と美術』35 pp.2-10

- 川勝政太郎 1998『日本石造美術辞典』東京堂出版
- 朽津信明 2003「白杵磨崖仏で観察される彩色表現について（2）－屋外彩色文化財の現地分析法の展開－」
『保存科学』41 pp.19-27
- 朽津信明 2007「エコーチップ試験による文化財石材の硬さに関する研究」『保存科学』46 pp.145-160
- 朽津信明 2008「東大寺石獅子の非破壊調査」『文化財保存修復学会第30回記念大会研究発表要旨集』
pp.90-91
- 久留米市立草野歴史資料館 1990『若宮八幡宮宝物展図録』
- 副島三喜男 1957「宗像神社の阿弥陀経石」『仏教芸術』30 pp.100-102
- 太宰府市史編集委員会 1998『太宰府市史 建築・美術工芸資料編』太宰府市
- 田邊三郎助 1976「伊賀別所本尊考」『仏教芸術』105 pp.75-91
- 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・西安文物保護修復センター 2007『唐代陵墓石彫像保護修復事業平成18年（2006）度報告』
- 中野玄三 1972『鞍馬寺』中央公論美術出版
- 奈良六大寺大観刊行会 1972『奈良六大寺大観 11 東大寺 3』岩波書店
- 福岡県教育委員会 1982『福岡県文化財目録』
- 藤倉郁子 1995『狛犬』岩波ブックサービスセンター
- 藤原祐希・入月俊明・林 広樹・田中裕一郎・渡辺真由子・清水謙次朗 2005「三重県伊賀市東部に分布する中新統阿波層群の層序と年代」『地質学雑誌』111 pp.779-791
- 前田 幹 1976「備前国と俊乘房重源」『仏教芸術』105 pp.118-129
- 山川 均 2006『石造物が語る中世職能集団』日本史リブレット 29 山川出版
- (2007年12月19日受付, 2008年1月24日受理)

Lithologic character of so-called “*Song-style lion sculptures.*”

Nobuaki KUCHITSU

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, 13-43 Ueno Park, Taito-Ku, Tokyo
110-8713, Japan

There are characteristic stone lion sculptures so-called “*Song-style lion sculptures*” in Japan, which are considered to be made between the 12 and 14 C probably under the influence of Song (Chinese) culture. Non-destructive analyses were carried out on the 12 *Song-style lion sculptures* and other related stone sculptures of middle age in Japan. As a result, stones constituting the *Song-style lion sculptures* can be divided into two groups based on their composition; calcareous stones such as limestone and non-calcareous stones such as sandstone. In Japan, no other stone sculptures made of limestone are known before the 12 C except for the *Song-style lion sculptures* analyzed this time, whereas there are abundant stone sculptures made of sandstone before that period. On the other hand, there are abundant stone lion sculptures made of limestone in China since the old time. Moreover, the *Song-style lion sculptures* made of limestone show similar posture as Chinese stone lion sculptures, whereas those made of non-calcareous stones show different posture which is similar to initial stone komainu's in Japan.